

中世からの伝統を秘めた貴重な文書

下田の街並みを通り抜ける旧道に沿って、鹿島神社の長い塀が続いています。つややかな緑の木々が朱色の鳥居や清浄な社殿に映えて、鹿島神社の境内には、いつも古社らしいたたずまいが漂っています。

鹿島神社は承安二年（一一七二）に常陸国から鹿島大明神を勧請したと伝えられ、下田はその門前町として栄えてきたともいわれています。

鹿島神社には貴重な絵図や文書が残されていますが、結鎮座文書もその一つ。結鎮座とは、宮座のことをいい、神社の氏子の集団のことです。この集団は、神社で行われる行事やしきたりなどを連綿と伝えてきました。

この結鎮座文書には、鎌倉時代初期からの記録が残されており、約八〇〇年の歴史や伝統がうか



がい知れる貴重な史料です。内容は、建久七年（一一九六）から現代にいたるまでの「座衆帳」をはじめ、南北朝時代の「座経営古記」、永正元年（一五〇四）の「鹿島宮法則」など、宮座関係文書十数点からなり、民間の宮座記録としては最古のものといえます。

なかでも座衆帳は、建久七年から現代にまで書き継がれているというもので、まさに歴史が息づいているのです。結鎮座の行事や組織についての宮座文書を伝え、村落構造や宮座構成の変遷がうかがえる貴重な史料となっています。

一月二十六日には、結鎮座祭の渡御の儀式がおごそかに行われ、古式ゆかしい装束に身を整えた十人衆が鹿島神社に詣ります。また、十月には御神輿が出る秋祭りがにぎやかに行われています。



シリーズ・まちの文化財 第七回

「鹿島神社結鎮座文書」